

近代文学作品論叢書 28

釈迢空
『死者の書』作品論集成

I

石内
徹
編

編者略歴

石内 徹（いしうち とおる）

昭和22年栃木県足利市に生まれる。

昭和44年國學院大學文学部文学学科卒業。

現在、千葉県立千葉高等学校教諭。

著書／『ものぐさ小論文』（右文書院、昭和62年）

『近代の作家① 折口信夫』（日本図書センター、平成3年）

『釈迢空「月しろの旗」注考』（折口信夫研究会、平成6年）

編書／『人物書誌大系 20 折口信夫』（日外アソシエーツ、昭和63年）

『人物書誌大系 23 神西清』（同上、平成3年）

『自筆原稿芹川行幸』（折口信夫研究会、平成元年）

『神西清蔵書目録』（日本図書センター、平成5年）

『折口信夫研究資料集成（全11巻・別巻1）』（大空社、平成6年） 他

現住所／〒299-44 千葉県長生郡睦沢町上市場320-74

近代文学作品論叢書 28 （全3巻） 釈迢空『死者の書』作品論集成Ⅰ

定価三九、〇〇〇円

（本体三七、八六四円）

一九九五年三月二二日 発行

編者 石内 徹

発行者 相川 仁童

発行所 大空社

東京都北区赤羽二―三六―一二

電話〇三（三九〇二）二七三二

振替〇〇一六〇―九一―四〇八八二

郵便番号一一五

印刷製本 株式会社フリオール

釈迢空 『死者の書』 作品論集成 目次

『死者の書』研究小史

石内 徹 1

釈迢空『死者の書』作品論研究文献目録

石内 徹 編 19

釈迢空『死者の書』作品論 I

昭和14年（1939）

白居 雅雄 釈迢空の「死者の書」…………… 47

室生 犀星 徹する処なし 諸家の諸作品を通読して〈文芸時評（5）〉…………… 48

昭和18年（1943）

堀 辰雄 大和路信濃路「死者の書」——古都における、初夏の夕ぐれの話——…………… 51

昭和19年(1944)	芳賀 檀 「死者の書」と歴史	59
昭和21年(1946)	山本健吉 美しき鎮魂歌——『死者の書』を讀みて——	65
昭和23年(1948)	吉田健一 小説論 平野謙『島崎藤村』福田恆存『作家の態度』釈迺空『死者の書』	85
昭和28年(1953)	神西 清 不思議な永遠の若さ 鎮魂歌「死者の書」の一曲	93
	加藤道夫 「死者の書」と共に	94
昭和29年(1954)	坂本徳松 「死者の書」の向日性	99
	藤井貞文 きさらぎの雪——「死者の書」解説——其一	111
昭和34年(1959)	江藤 淳 小説の文体	121

昭和36年(1961)

白田甚五郎 古国のいざなひ——「口ぶえ」と「死者の書」——……………133

益田勝実 「日輪」と「死者の書」の間……………140

川村二郎 『死者の書』について……………149

昭和37年(1962)

山本健吉 当麻から巢山へ……………163

昭和38年(1963)

小谷 恒 「詩集・小説」案内……………179

昭和39年(1964)

高安周吉 「死者の書」について〔一〕……………189

高安周吉 死者の書について〔二〕……………192

昭和40年(1965)

高安周吉 死者の書について 三……………197

高安周吉 死者の書について〔四〕……………200

高安周吉 死者の書について〔五〕……………203

高安周吉	死者の書雑俎	206
高安周吉	死者の書について 六	208
高安周吉	死者の書について 七	212
高安周吉	死者の書について (八)	215
高安周吉	死者の書について 九	217
加藤守雄	「死者の書」のあとさき	220
岡野弘彦	折口学の髓「死者の書」 民俗に示された日本人の知恵	224
高安周吉	死者の書雑俎 (十一)	239
昭和42年 (1967)		
加藤守雄	わが師 折口信夫 (第二部)	245
森 豊	「死者の書」と「山姥」〈芸林逍遙・Ⅱ〉	261
伊馬春部／中野重治／加藤守雄／小谷 恒／岡野弘彦	詩人釈迢空〈座談会 全集にそって〉	266
加藤守雄／川村二郎／小谷 恒／岡野弘彦	『死者の書』をめぐる〈座談会 全集にそって〉	272
昭和43年 (1968)		
奈良橋善司	折口信夫論——死語 (一)——	281

昭和44年（1969）	奈良橋善司	小説「死者の書」の話	289
昭和45年（1970）	堀内民一	釈迢空研究序説 『死者の書』の地霊感覚	297
昭和47年（1972）	岩田 正	『死者の書』をめぐる／死者は甦るか	319
	北野愛美子	『死者の書』をよんで	343
昭和48年（1973）	阿部 正路	釈迢空Ⅱ折口信夫の浪漫	357
	佐々木重治郎	折口信夫・文学における根源力	362
	太田代志朗	遥かなる神々の詞章——折口信夫断想	372
	高橋英夫	物語のアイデア——「もののはれ」と現代——	380
	本多秋五	『死者の書』メモ（一頁時評）	387
	佐伯彰一	『死者の書』のディレンマ——日本の「私」を求めてIX	388
	馬場あき子	『死者の書』の世界にふれて	402
	水木直箭	随筆『死者の書』	412

第II巻 目次

釈道空『死者の書』作品論 II

昭和49年(1974)

川村二郎

解説

篠田一士

この珍貴の感覚(下)——詩から小説へ——

野崎守英

彼方なるものとしての光——折口信夫『死者の書』——

昭和50年(1975)

大岡昇平

折口学と文学

笠原伸夫

逆光の近代

川村二郎

『死者の書』再説——文学の根への問い 10——

昭和51年(1976)

佐藤えみ子

『死者の書』——試論——

森 磐根

折口信夫『死者の書』論——日本文学の本質——

昭和52年(1977)

天沢退二郎

『死者の書』あるいは二つの〈作品〉

井口樹生

『死者の書』論

饗庭孝男

悲劇の精神——折口信夫『死者の書』——

昭和53年(1978)

大室幹雄

二人のポエタ・ドクトゥス
——『指輪物語』と『死者の書』の世界——

笠原伸夫

『死者の書』の方法

笠原伸夫

結 現代の幽暗部へ

村松定孝

『死者の書』と泉鏡花〈折口学と私Ⅳ〉

阿部正路

折口信夫の「前世生替」始末

昭和54年(1979)

藤井貞和

『死者の書』

東郷克美

死者の書——他界への恐怖と憧憬——

昭和55年(1980)

吉益 譲

「折口信夫の『死者の書』について」

中村 浩

『死者の書』地名考

昭和57年(1982)

梶木 剛

『死者の書』／釈道空の世界Ⅱ

昭和58年(1983)

中村 浩

二上山と大津皇子と

江藤 淳

女の旅立〈女の記号学(3)〉

昭和59年（1984）

長谷川政春	史論・小説・語り手——『死者の書』論のための序章——	295
竹内清己	昭和と辰雄にみる鎮魂	

——近代日本文学における生と死（1）——……………319

高橋広満	「死者の書」論——をち水求めと、をち水つかい——	331
------	--------------------------	-----

高梨一美	「死者の書」の主題……………	359
------	----------------	-----

中農晶三	折口信夫の『死者の書』	
------	-------------	--

——大津皇子と中将姫へのレクイエム——……………381

第Ⅲ巻 目次

釈道空『死者の書』作品論 Ⅲ

昭和60年（1985）

大谷和子	豊饒なる闇——『万葉集』、『金枝篇』、折口信夫『死者の書』をめぐる……………	5
------	--	---

石内 徹	堀辰雄の折口信夫受容——民俗学を視座として——……………	11
------	------------------------------	----

川村 湊	声の幻——言霊と折口信夫……………	22
------	-------------------	----

加藤守雄	性の視野から……………	35
------	-------------	----

昭和61年（1986）

阿久根聡美	『死者の書』——復活に見える鎮魂の意義……………	51
-------	--------------------------	----

小野左和子	『死者の書』の視覚的問題について……………	62
-------	-----------------------	----

石内 徹	文芸思潮のドグマ……………	68
------	---------------	----

昭和62年（1987）

川村二郎	二上山と『死者の書』……………	75
------	-----------------	----

塚本邦雄	『死者の書』……………	81
------	-------------	----

平成元年（1989）

原山喜亥	折口信夫『死者の書』……………	
------	-----------------	--

——著者自筆原稿と訂正原本に基づく訂正表——……………87

岡谷公二	「口ぶえ」から『死者の書』へ……………	93
------	---------------------	----

高橋広満	天平宝字四年——『死者の書』の時——……………	118
------	-------------------------	-----

平成3年（1991）

夏石番矢	落日のカタルシス	
------	----------	--

——折口信夫『死者の書』の重層性——……………123

石内 徹	死と再生……………	162
------	-----------	-----

吉田達志	黒衣の神——折口信夫『死者の書』の世界——……………	174
------	----------------------------	-----

結城 文	「魂乞い曼陀羅」上——折口信夫『死者の書』論——……………	201
------	-------------------------------	-----

結城 文	「魂乞い曼陀羅」下——折口信夫『死者の書』論——……………	205
------	-------------------------------	-----

平成4年（1992）

持田叙子	享楽主義者の系譜……………	
------	---------------	--

——ひとつの『死者の書』論として——……………211

長谷川政春	重層する声——『死者の書』の語りと構造——	225
森安理文	『死者の書』論	260
石内 徹	折口信夫にとっての神話伝説	284
村井 紀	『死者の書』について	288
平成5年(1993)		
石内 徹	『死者の書』攷——大津皇子を視点として——	299
石内 徹	エジプトの『死者之書』と『死者の書』	309
平成6年(1994)		
松浦寿輝	神の登音	317
あとがき		323
石内 徹		

『死者の書』研究小史

石内
徹

一 テキスト

釈迢空の『死者の書』の初出は、昭和十四年一月から三月まで「日本評論」に掲載された。後、昭和十八年九月、大幅に改稿の上、単行本として青磁社から上梓され、さらに、戦後、角川書店から自注ともいふべき「山越しの阿弥陀像の画因」を付載して再刊された。昭和四十九年五月一日、川村二郎の解説を付して発行された中央公論社の文庫版『死者の書』は、この角川版の踏襲である。『死者の書』の文庫化が、昭和四十九年であることは、研究史の上で留意すべきであろう。その前年の昭和四十八年に空前の折口ブームが起っていたからである。また、同書解説で川村二郎が『死者の書』は、明治以後の日本近代小説の、最高の成果である。^①と最高の褒辞を呈したことも研究史の上で画期的な出来事として記憶されるべきものである。

さて、青磁社版『死者の書』は、昭和十八年という第二次大戦中に刊行されたものとしては、きわめて豪華な装幀をほどこされて上梓された。白表紙には、「前後とも古代エジプトのミイラの棺の色刷りを切り抜いて貼付し、見返しには光明皇后筆の「楽毅論」を紺地全泥の写経に模して印刷し」^②たものに、黒のカバーをかけてある。当時、この本を手にした吉田健一が「まだ東京全体が焼け野原だった時代に、久し振りに凝った装釘の本を手にして、かういふものがあつたのかといふ気持が先に立つた。」^③と回想している。それだけの感慨を催させるに足るすぐれた装幀だったのである。たしかに、今日からみても、重厚な装幀をほどこした造本といえる。それにもかかわらず、この『死者の書』についての時評は、紹介をふくめて、たった四編（そのうち二編は初出時のもの）しかあらわれなかった。理由は、小

説として難解にすぎたのである。

二 『死者の書』の同時代評

『死者の書』が、雑誌「日本評論」に発表された昭和十四年に『死者の書』についての言及は、紹介の域にとどまるものだが、二編である。その嚆矢が、昭和十四年二月五日の「国学院大学新聞」九二号の四頁目に掲載された白居雅雄の「釈迢空の『死者の書』」という短い文章である。白居雅雄の記事は、同年二月五日発行の新聞に掲載されているのであるから、内容が『死者の書』の簡単な紹介で終わっているのもやむをえない。また、『死者の書』を折口信夫の「処女小説」というような誤った言及もあるが、折口信夫の作家としての活動そのものが、あまり知られていなかったのだから、これもいたしかたなかったであろう。

ところで、日刊紙の「文芸時評」で『死者の書』をとりあげた嚆矢は、室生犀星である。室生犀星は、昭和十四年三月四日の「朝日新聞」に率直な読後感を発表している。

小説ばなれのした、何だこんな物とひとくちに云へないものを持つてゐる不思議な、何かありそうな薩張り分らんところに馬鹿にならぬものを含んでゐる作品である。⁽⁴⁾

犀星は、作品の背後にあるものが、「私に薩張り分らんが何かしらあると思はせる⁽⁵⁾」とおぼろげながら作品の背後に隠されているものの存在が、等閑視できないことを指摘している。これだけの指摘とはいえ、他の評論家や作家たちが一切口を緘して黙しているなかで、唯一ともいふべき言及であり、特記するに値しよう。

昭和十八年、単行本『死者の書』の上梓後、堀辰雄が、同年八月「婦人公論」に「大和路信濃路 死者の書」で丁

寧な『死者の書』の鑑賞を公表した。堀辰雄は、『死者の書』を「唯一の古代小説」と規定し、

万葉学者としてもっとも独創に富んだ学説をとなへてきた、このすぐれた詩人が、その研究の一端をどこまでも詩的作品として世に問うたところに、あの作品の人性があるのだね^⑥。

と指摘し、その上で、

だが、どうしてあれほどのものが、ほとんど世評に上らなかつたのだろう。

と疑問をなげかけている。この疑問については、小説として難解にすぎたということに尽きるであろう。この堀辰雄の評言は、先の室生犀星の評言と同じく、小説の裏に折口信夫の学問を想定している。つまり、「研究の一端をどこまでも詩的作品として世に問うた^⑦」というように、学問の創作化したものというところである。これは、のちの『死者の書』論が、ほとんど折口学を導入して、作品を解析しており、その方法の先鞭をつけたものといえよう。

翌十九年三月、芳賀檀の『死者の書』と歴史^⑧」が発表される。三頁という短いものだが、戦時下の時代色の影の濃い評論である。この評論に創見があるとすれば、『死者の書』を「生命の書」と捉えた点であろう。「何故なら、この美しい魂の物語りには、どこにも『死』などと言ふ、暗い、怖ろしいものの姿は見当らないからである。」とその理由を提示している。しかし、芳賀檀の評論は、冒頭半頁分の作品の紹介とそれ以後に展開された評言とが乖離しているという印象をぬぐいがたい。これは、評者の思いを『死者の書』を出しにして語っているからである。それだけに、今日から見れば、堀辰雄の『死者の書』への言及が時勢に流されることなく、はるかに作品の本質をみごとに突いたすぐれた評言であったことが理解できる。